

## 主 題：私たちは主を宣べ伝える 7

## 聖書箇所：コリント人への手紙第一 2章1-5節

コリント人への手紙第一2章、今日は1節から学んでいきます。「私たちは十字架につけられた主を宣べ伝えるのである」、これこそがこの世にあって主に逆らい続けている人たちへの、私たちクリスチャンからのメッセージです。たとえ、人々がどのように非難しようとも、私たちは十字架に架けられた主イエス・キリストを、そして、このイエスの福音を妥協しないで、また、結果を恐れずに、それを主にお委ねして語り続けて行くのです。パウロはまさにそれを実践していた信仰者でした。偽りの福音が入り込んで来たコリント教会の兄弟たちに、純粋な福音を語ることの大切さをパウロは改めて教えていきます。そして、まさに、パウロ自身がそのように歩んでいたということを読者たちに思い起こさせるのです。

2：1をご覧ください。「さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、…」とこのように記されています。パウロが初めてコリントの町に宣教のために入った時のことです。そのときのことを読者に思い起こさせています。この箇所を原語そのままに訳すと「私もあなたがたのところへ行ったときは、兄弟たち、…」となります。初めの「私が」ということばをもう少し正確に訳すと「私もまた、」となります。パウロがこのことばを最初に持って来たのは、それを強調したいからですが、「今まで私が語って来たこと、それを私もまた実践している」と言います。彼はただ語っただけでなく、それを実践していたのです。そのことをここで強調するのです。

「思い出してください。私がコリントの町に来たときに私がしたことを…」と言います。彼が語って来たことを彼は実践し、そして、今一度、そのことを読者たちに教えるのです。パウロは十字架につけられたキリスト、つまり、福音のメッセージを宣べ伝えるに当たり、そのメッセージに何もものも付け加えてはならないということを教え、そして、そのように彼は福音を語って来ました。

パウロの宣教は、私たち信仰者にとって、時代も場所も違いますが、大変すばらしい模範です。今日、私たちは2章の1～5節を見ていきますが、このみことばから彼が教えるのは、彼が宣教したこと、彼の宣教において決して譲らなかつた二つのことです。そのことを今から見ていきます。願わくは、この学びを通して、あなたも私もその模範に倣って宣教を行い続けて行くことです。

## ◎パウロが宣教において決して譲らなかつた二つのこと

## A. パウロのメッセージ 1-2節

1節にはパウロのメッセージが記されています。「…私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。」、気付かれたでしょうか？ここでパウロは自分が「したこと」と「しなかつたこと」を記しています。彼がしたことは「神のあかしを宣べ伝えること」です。しなかつたことは「すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えること」です。それがどういうことなのか、ごいっしょに見ていきましょう。

## 1. パウロがしたこと 1節

「神のあかしを宣べ伝えたこと」、パウロがコリントの町へ初めて行ったときに、神の救いを全く知らない人たちに対して、パウロは「神のあかしを宣べ伝え」たのです。

## 1) 「神のあかし」とは何か？

「あかし」ということばは、新約聖書に28回出て来ますが、「あかし」と訳されているのはこの箇所だけです。後は、「秘儀（隠された教え）」が1回、「秘められた」が2回、「秘密」も2回、後の23回は「奥義」と訳されています。実際に、2：7をご覧くださいと「私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、…」と書かれています。確かに、この1節で日本語訳では「あかし」となっていますが、このことばのギリシャ語は「ミステリオン」です。「神秘、不思議」と訳される「ミステリー」ということばの語源になっています。この「ミステリー」ということばは日本語では「奥義」と訳されます。もちろん、これはキリスト教用語として使われています。

「奥義」とは？：「人間の理性によっては絶対に知ることのない神の真理を、神ご自身が啓示という特別な方法で私たちに明らかにしてくださった」ということです。「啓示」という方法を通して、神は私たちに神ご自身の真理を明らかにされたのです。だから、知ることができたのです。私たちがどんなに勉強しても私たちは神の意図やご計画を知ることはありません。神が明らかにしてくださったから知ることができるのです。これが「奥義」です。

だから、まず、パウロはこの1節で、「神のあかし、神の奥義」を宣べ伝えたのです。これだけでは

よく分かりませんね。そこでこの「ミステリー」ということばをギリシャ語の辞典で見るとこのような説明がされています。とても分かり易い説明です。「キリストを通して人類を救う神の計画である」と。

はっきりしました。「昔は隠されていたが、今は啓示によって人類に明らかにされている救いの奥義である」とこのようにギリシャ語辞典はこのことばの説明をしています。ですから、ここで使われている「あかし」ということば、「奥義」と訳せる「ミステリオン」ということばは、「キリストを通して人類を救う神のご計画である」と言えます。

そうすると、この1節はより鮮明になりました。パウロが言っているのは、「私がしたことは、神によって明らかにされた、主イエス・キリストを通して罪人を救うという神のご計画、これを宣べ伝えた」ということです。これがパウロのメッセージだったと言うのです。

## 2) 宣べ伝える

その後「宣べ伝える」とあります。これは「宣伝する、告げ知らせる」ということです。人々の前でそれを明確に分かり易くはっきりと説明するということです。ですから、パウロがこのコリントの町で行った福音宣教を見た時に、彼は自分の考えや自分の思いを語ったのではなかったということです。彼は神によって啓示された、神から示された神の真理を明確にしたのです。その「真理」とは、繰り返しになりますが、「イエス・キリストを通して罪人を救う神さまのご計画」です。この福音のメッセージを彼は曲げることしないで、正確に、人々が分かるように宣べ伝えた、告げ知らせたのだと言うのです。

Ⅱコリント4：2で「恥ずべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことばを曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。」と言っているように、パウロはこの通りのことをしたのです。人間のことばではなかったのです。彼の思い、経験でもなかった。彼は神が示してくださったその真理を語ったのです。「イエス・キリストの救い」を彼は語ったのです。これがパウロがコリントの町でしたことです。

## 2. パウロがしなかったこと 1節

では、パウロがしなかったことは何でしょう？それは「すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えること」です。この「すぐれた」とは「卓越している」ということです。「ことば」と「知恵」、この二つの名詞はかなり類似した意味があります。「ことば」とは「雄弁さ、巧みな話術」です。「知恵」とは「巧みなことば使い」のことです。知恵を用いてことばを選んで、そして、語るということです。ギリシャ語の辞書を見るとこのように訳しています。「弁舌や知恵においてすぐれていて、すぐれたことばや知恵を用いている」と。弁舌において秀でている、すぐれた弁舌を持っているということです。

ですから、パウロは自分自身の人間的な知恵や人間的な巧みな話術を用いてこの福音を伝えたのではなかったということです。罪人が救われて欲しいという願いを持っていましたが、そのためにパウロは「どのようにすればこの人たちが信じるだろうか？」と、人間的な知恵を用いて、人間的な話術によって彼らを救いへ導こうとはしなかったのです。彼がしたことは、神が示してくださったその救いの真理を、福音のメッセージを正確に曲げずに語ったのです。

確かに、皆さんも福音宣教をしていて何度も経験されたでしょう。愛する人たちが救われて欲しいと願う余りに、彼らが「イエス」と言うような福音を語ってしまう傾向にあたりします。そういう弱さを持っています。相手が本当に救われて欲しいので、その人が「イエス」と言う答えを引き出したいために、私たちはもしかすると信じやすい福音を語るようになってしまう可能性があります。私たちはそのようなことをしてはならないのです。私たちは罪人がこの救いに与るために、彼らが「イエス」と言いやすい福音に変えてしまう傾向があるのです。

パウロは「私はそのようなことはしない」と教えました。「こんな難しいことを語ったら、こんなハードルの高いことを語ったら信じないかもしれない…」などと、パウロはそのようなことには一切恐れを抱きませんでした。パウロは神が「語れ！」というメッセージを語ったのです。私たちは結果を見て、そして、その結果が自分たちの望んでいる結果であるようにと、私たちのメッセージそのものを変えてしまうような、実際に、そういうことがキリスト教会の中でも起こっているのです。パウロのことばを借りるなら「決して、そのようなことをしてはならない！」です。

皆さん、確かに、神が語れと言うメッセージを私たちが普通に語ったら、そのメッセージを聞いていたたいだれが信じるだろうか？と、そのように思うかもしれません。でも、そのことはあなたが心配することではありません。救いを為すのは神であり、その神のみわざにあなたの助けは必要ではないのです。私たちは何となく人を救うために私たちが神を助けないといけないと誤解している可能性があります。人を救うためにあなたの働きは全く必要とされていないのです。あなたや私に託された責任は、神

が私たちに与えてくださった神の真理を正確に語ることです。それが私たちの責任です。パウロはそれをして来たと言うのです。

### 3. パウロの決心 2節

パウロがこのように神のことばを曲げることなくその通り語ったその理由が2節に記されています。2節は「なぜなら…」という接続詞で始まっています。パウロがこのように神の真理を曲げることなく、結果を恐れずに語ったその理由です。こう続きます「…私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」と。パウロがあらかじめ決めていたこと、そのことをここでパウロは語るのです。

1) 十字架につけられた : これは一つのギリシャ語ですが、この動詞を完了形で書いています。それはもうすでに過去に起こった事実です。敢えて、完了形を用いることで、その事実がもたらす結果が今も継続して続いているということです。これは十字架につけられたイエスのことです。イエスが十字架に架かったのは確かに過去のことです。でも、イエス・キリストが十字架に架かることによってもたらされたその救いの効果は今も変わらず続いているということです。今から約二千年前にイエス・キリストの十字架を信じて救いに与った人たち、今のこの21世紀の私たち、どちらもそのメッセージを信じることによって同じように救われるのです。パウロはそのことを伝えたいのです。イエスが十字架につけられたその歴史上の事実と、この十字架の事実によってもたらされたその救いの効果は、今も変わらず続いていると、それを伝えたいためにパウロは敢えてこのことばを完了形を使って語っているのです。

2) 何も知らないこと : 「十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心した」とあります。この「知る」とは「評価をする、価値を認める」という意味があります。ここだけを読むと、パウロはイエス・キリスト以外のことは全部忘れようとしていたのか?と思いますが、そんなことは努力しても無理です。何かのことを一生懸命忘れようとしても私たちにはできません。そういうことをパウロが言っているのではありません。先に見た通り「知る」とは「評価をする、価値を認める」ということでした。ですから、パウロは「この十字架につけられたイエス・キリストの他に評価に値するもの、つまり、価値を認めるものはない。」ということを行っているのです。

イエスの救いを拒み続けている者たち、この救いに与っていない人たちにとって最も大切なものは何か、最も価値あるものは何か?それは「イエス・キリストの十字架だ」と言うのです。私たちは人々の前でイエスがどんなに素晴らしいお方であったのか、どんなに大きな奇蹟をしたのか、確かに、それは事実です。でも、パウロは「それも事実だけれど、彼らに一番必要なことは十字架に架かったイエス・キリスト、そのメッセージだ」と言うのです。ですから、イエス・キリスト、十字架で死んでくださったこのお方以外のことは何も知らないかのようにパウロがコリントの町で振る舞ったのは、このキリストの十字架の重要性、その本当の価値というものを彼が知っていたからです。

皆さん、この福音によって、いや、この福音だけが罪人を救うのです。それ以外の方法で罪人が救いに与る道はないのです。これしかないのです。そのことをパウロはここで言いたいのです。このイエスのことを全く知らない、救いに与っていない人たちにとって最も大切なメッセージは何か?「イエス・キリストの十字架」だと。あの十字架においてイエスが成し遂げてくださった救いのみわざ、これこそが最も大切なのだと言うのです。だから、パウロはそれ以外のこと、もちろん、それ以外のことも語ることはあったでしょう、でも、彼はこの人たちに何を伝えなければいけないのか、そのことをしっかりと覚えてそのメッセージを語ったと、それがこの2節で彼が言うことです。まさに、彼がガラテヤ書6:14で「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」と言う通りに彼は生きていたのです。

彼は確かにキリストの十字架を誇りとして生きていました。なぜなら、この十字架によって罪人が救われるからです。恐らく、皆さんもこのガラテヤ6:14のみことばがお好きだと思います。「私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」と、十字架が私の誇りです。確かに、私たちが誇るべきものはこのイエスの十字架です。この十字架を私たちが見上げるときに、私たちは神とはどんなお方なのかを知ることができるからです。

#### ◎十字架を見上げたときに教えられること

a) 神はさばき主 : なぜ、イエスが十字架に架かる必要があったのか?神が罪人に対して「分かった。わたしはあなたがたの罪を赦しましょう」と言われなかったのでしょうか?なぜ、イエス・キリストを私たちの身代わりとして十字架に磔にしたのか?それが教えていることは、必ず、私たちの罪はさばかれるということです。だれ一人としてこのさばきから逃れられることができる人はいません。ある人はその罪ゆえに永遠のさばきに地獄に至るし、ある人たちは救われて神からごほうびをいただくと。で

も、少なくとも、すべての人が、あなたが必ずこの神の前に立つのです。神がさばき主だということ、必ず罪をおさばきになるお方だということ、このことがイエスの十字架によって明らかに示されたのです。神は罪をさばいたのです。あなたの罪はイエス・キリストの上に載せられて、イエス・キリストはあなたの身代わりとなって死んでくださった。必ず、罪のさばきはあるのです。

**b) 完全に聖い方** : 罪を見過ごすことはできなかったのです。どんな小さな罪でもそれは神の前に汚れたものであるゆえに、神は必ずその罪をさばかれるのです。それは神が完全に聖いお方だからです。

**c) 贖い主** : イエス・キリストのいのちはあなたの罪の代価であった。神はあなたを罪からその永遠の滅びから救い出すためにご自身のいのちという最も高価な代価を払ってくださった。それによって、あなたを罪から救い出してくださいました。ですから、十字架を見た時に、私の神はいのちまで捨てて私をその罪から贖い出してくださいました、贖い主であると教えられます。このイエス・キリストのいのちによって、この代価によってあなたも私も永遠の地獄から、また、サタンの奴隷であった私たちがそこから解放されて神の奴隷へと生まれ変わったのです。

**d) 救い主** : いろんな宗教家たちがいます。教祖は山ほど存在しています。でも、救い主はひとりです。あなたの罪の身代わりとなって死んでくださったのはイエスだけです。ですから、私たちが十字架を見上げたときに、確かにこの方が、この方だけが救い主であることを私たちは知るのであるのです。

**e) 愛の主** : 創造主なる神が、すべての被造物によって崇拝されるべきお方が、人としてこの世に来てくださり、罪の無い人生を歩まれ、そして、あなたのすべての罪を負って十字架にあなたの身代わりとなって架かってくださり、あなたの受けるべき罰を代わりに受けてくださった。これが愛でなかったら何ですか！こんなにも私たちのために犠牲を払ってくださった。こんな愛を私たちは見たこともない、聞いたこともない。でも、十字架を見上げたときに、私の神はこれほどまでにして私のような者を愛してくださいました。だから、私たちも十字架を見上げるときにこの主を思い、この十字架を私たちは心から誇るのです。

主イエス・キリストの福音を語り続けたパウロ、これだけが罪人を救いへと導くことを知っていたゆえに重大さを知っていたゆえに、彼はもうそれ以外のことをすべて知らない、このメッセージを語るなければいけないとそのことを知っていたから、そのことを決心していたのです。

もちろん注釈として告げておかなければいけないことがあります。パウロのメッセージが常にイエスの十字架と復活だけだったのか？そうではありません。彼がこのように伝道に行ったときにはこのメッセージを語ったのですが、パウロは宣教をしたときに、神のメッセージを万遍なく語っています。パウロはコリントの町に一年半の間滞在していたことを使徒の働き 18 : 11 で教えています。使徒 18 : 11 「そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」と、「彼らの間で神のことばを教え続けた。」とあります。一年半もの間、ただ福音を語っていた訳ではありません。「神のことば」を語ったのです。また、同じ使徒 20 : 27 には「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」とあります。これはパウロがエルサレムに上る途中にミレトに立ち寄ったときにエペソンの長老たちを呼んで語ったことです。

なぜ、パウロは神のおことばのすべてを語ったのか？彼自身が教えています。使徒 20 : 32 「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中であって御国を継がせることができるのです。」と。あなたが信仰において成長したいと思うなら、このみことばに立つことです。この聖書だけがあなたや私を成長させてくれるのです。パウロはそのことを知っていたゆえに、この聖書のことばを語ったのです。ですから、注釈として、彼は福音宣教をするときに福音のメッセージを正確に大胆に恐れることなく語り続けました。そして、救いに与った者たちにはみことばをしっかりと教えたのです。それはそれによって彼らが成長するためにです。

まさに、彼の働きはイエスが命じた大命令の実践だと思いませんか！「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」(マタイ 20 : 19)、どのようにして弟子を作るのか？伝道するのです。そして、救われた者たちを訓練していくのです。

## **B. パウロの宣教の真の目的 3-5 節**

パウロのメッセージを見ました。次に、3-5 節にはパウロの宣教の真の目的、彼が一番に目的としていたものは何なのか？そのことを教えています。彼はメッセージの純潔さを譲ることをしなかったし、その目的を変えることもしなかった。この目的に沿って彼はすべてのことをしていたのです。

### **1. 宣教の態度 3 節**

宣教に殉じたパウロですが、彼自身が語ったメッセージを見ましたが、3節には彼自身の宣教における態度を語っています。どんな心をもって宣教したのか？3節「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。」

### 1) 自分の弱さを知っていたパウロ

パウロはコリントの町にいたときには「弱く、恐れおののいていました。」と言います。この「弱さ」というのは、肉体的な弱さと心においての弱さがあります。恐らく、ここでパウロが言っているのはその両方でしょう。パウロは初めてヨーロッパに入ってヨーロッパ宣教が始まりました。ピリピに行つて、テサロニケに行つて、ベレヤに行つて、そして、アテネに下つて来て、その後コリントへと来たのです。悲しいことに、彼は様々な迫害を経験するのです。ですから、彼自身はいろんな所でその肉体的なプレッシャーを感じていたでしょう。確かに、Ⅱコリント11：28には「:28このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。」と、外部からのいろんなプレッシャーを彼は経験していたし、また、彼の心の中にはイエスを信じたクリスチャンたちのことを思い彼らのことを案じていたのです。「どうしているのだろうか…？惑わされていないだろうか…？真理にしっかり立っているのだろうか？」と。ですからパウロは、29節「:29だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか。」と言っています。

彼が「弱さ」と言ったときに、確かに身体的なこともあるし、心においても弱さを彼自身が認めていたのです。私たちはパウロという人物を思うときに、何かスーパーマン的な存在のように思いませんか？どんなことでも克服したと。でも、パウロは言うのです「自分は弱いのだ」と。もしかすると、この「弱さ」は彼自身の外見だったのかもしれない。というのは、Ⅱコリント10：10に「彼らは言います。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会った場合の彼は弱々しく、その話しぶりは、なっていない。」と書かれているからです。実際に、パウロはいろんな病いを患っていたようです。その病いはよく分かっていませんが、何か肉体的な病いを患っていたようです。実際にパウロを見た人たちがそのように言うのです、「弱々しい」と。そのような感じだったのかもしれない。でも皆さん、少なくとも私たちが言えることは、パウロ自身が自分の弱さをちゃんと覚えていたということです。ちゃんと知っていたのです。私たちキリスト者にとって、自分の弱さを知ることは感謝なことです。

コリント教会の人たちには「二種類の人たち」がいます。(1)自分自身に大変な自信を持っている人です。自分の知恵を自慢して自分はすばらしいと思っているのでしょう。パウロはそうではなかった。(2)自分の弱さに気付いている人です。自分の弱さを彼はちゃんと心得ていたのです。どんなに願っても自分の願っていることができるかというところではありません。そして、考えてください。神が私たちの生活の中でどんな働きをされているか？その中の一つ「私たちを謙虚にする」という働きをされていませんか？私たちの自信を砕いていかれる、自分でできると思っていたものが実は自分にはできないのだと。もしかすると、人間関係のもつれかもしれないし、子どもたちの反抗かもしれないし、病気かもしれないし、失業かもしれない。私たちは日々いろんなことを経験する訳で、そういうときに私たちは自分の無力さに気が付くのです。

もし、私たちが主を知らなければ、唯一の解決方法は気持ちの持ち方を変えることしか対処方法はありません。「そんなネガティブに考えないで、もう少し物事をポジティブに見て」と、でも、それは本当の解決をもたらさないことはみな分かっています。私たちクリスチャンは神から完璧な解決方法をいただきました。どんな方法か？神のところに持っていくのです。「助けてください」と神の所にいく訳でしょう。ですから、パウロが言うのです。Ⅱコリント12：9-10「:9しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。:10ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と、自分の弱さに気付いている人は強いと言います。なぜなら、自分の弱さに気付いている人は自分に頼るのではなく神に頼るからです。私たち信仰者の力というのは、私の力ではないのです。生まれながらに持っている力ではありません。私の力、あなたの力は神なのです。

残念ながら、私たちはその方に頼って生きることができなのに、その方に頼って生きようとしていないのです。なおも私たちは失敗の連続なのに、自分の地位や力に頼って生きようとしているのです。ですからパウロが言ったのです。「私が弱いときにこそ、私は強い」と。神が私たちのうちを通して働かれるときに、私たちは神の御力を知るのです。

パウロはまず自分の弱さを知っていました。ですから、そのことからしてもパウロは常に神に信頼を置いて、神の助けを仰ぎながら歩んでいた人物だということが分かります。

### 2) 務めの重大さを知っていたパウロ

もう一つは「恐れおののいていた」ということばです。

(1) **自分の不適任さを知っていた** : 自分の弱さを知っていたパウロは、自分に与えられた神からの務めの重大さを知っています。彼に与えられたのはこの「キリストを宣べ伝える」という務めです。そして、私たちにもその務めが与えられているわけです。彼はその務めをいただいたときに「できる、自分にはできることだ」とは言っていません。パウロ自身は「恐れおののく」ということばを使っています。パウロはこのことばを使ったときに、自分のいのちを案じていたのではないことは明らかです。パウロは喜んでキリストのためにいのちを捨てることを覚悟していました。ですから「恐れおののく」と言うと、何か敵がやって来て自分を捕えるのではないか、自分のいのちが無くなってしまわないかと、そういうことに恐れおののいていた、恐れていたのではありません。彼が恐れていたのは、このすばらしい神の福音を伝えるという務めを神からいただいたけれども、自分はその働きには不適任だということを知っていたことです。自分はその働きには不適切であって不十分であって力不足であると言うのです。そのことを知っていなければ神のところに行かないでしょう？できると思っている人は神なしにやっつけてしまおうとします。パウロはそうではなかったのです。神からいただいた務めのすばらしさを知っていましたが、同時に、自分はそれにふさわしくないことも知っているのです。

(2) **自分の罪深さを知っていた** : この「恐れおののく」ということばですが、新約聖書の中には数回出て来ます。ピリピ2:12には「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」とあります。ここでは「神への尊敬と畏敬の念」のことを言っています。パウロは神を心から愛していました。神に対する畏敬の念、大変なリスペクトを持っていたわけです。ですから、彼はいかなる面でも神に反することをしたくないという思いを持っていました。神に逆らうこと、神が喜ばれないこと、神を悲しませること、神を失望させること、そのようなことを私はしたくない。でも、してしまう…。そこから出て来る「恐れおののき」だったのです。

それほどまでに彼は神を愛し、何とかして神に喜ばれることをしていきたいと思っていました。ですから、自分のいのちが惜しくて敵に対して恐れおののいていたのではなくて、いかなる面でも神に反することをしたくないとする思い、神を悲しませ神を失望させることから生じて来るその恐れとおののきのことだったのです。キャンベル・モルガンは「恐れおののいて」についてこのように言っています。「ラッパが不確実な音を出さないように、という恐れおののきである。自信の欠乏は深刻であった。これはしかし、すべて説教する者の力の秘訣なのである。」

今、私たちがこのパウロのことばを聞いて教えられるのは、パウロは自分のことを正しく知っていました。私たちが神を知れば知るほど、神は私たち自身のことを明確に知らしめてくださる。なぜなら、神を知れば知るほど、私たちはこの神のこんなご好意に全くふさわしくないことに気付くからです。それに気付くことによって私たちはこの神に対してより感謝する者になるのです。こうして生かされていることも神の恵みです。でも、生かされていること自体がまさに私たちにふさわしくないのです。私たちは神のさばきを受けてしかるべき存在でしょう。イエスを信じて感謝していると言いながら、その同じ口で私たちはだれかの悪口を言ったりする訳です。ヤコブが教えるように…。

いったい、いつまで私たちはこの地上にいて神の前に罪を犯し続けていくのか。パウロは「私は本当に弱い者だ。行いにおいても心においても。また、神を喜ばせようと思っていながらもそれができていない。自分は本当にこのような福音を伝えるという務めに与っているけれど、私は全くそれに不適任であって、余りにも罪深い者だ。」と、こういう思いをパウロ自身が抱いていたことをこのみことばが私たちに告げるのです。だから、神は彼を使ったのです。自分に自信を持っている人、神はそんな方をお使いにならない。神が使う働き人は本当の自分の姿を知っている人です。まさに、パウロが私たちに語ってくれたように…。

## 2. 宣教のカギ 4節

パウロ自身がいかに弱いのかということと話した後、パウロはその宣教のカギを教えています。4節「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。」、パウロはここで「私のことばと私の宣教」と言っています。「私のことば」とは、恐らく、

口から出て来ることばだけでなく、その話し方や話し振りのことでしょう。「私の宣教」とはメッセージのことです。このことばはどちらも非常に類似していて区別するのが難しいのです。レオン・モーリス先生が言うように「恐らく、宣教の方法と内容の両面がここに含まれているだろう」ということです。語るメッセージと語る者のその方法のことです。どういう心でどういう方法でそのメッセージを伝えるのかということなのです。

ここにも、1節と同じように、パウロが「したこと」と「しなかったこと」が記されています。

1) パウロがしなかったこと : 自分のメッセージ、また、その伝え方も、「説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、」と言います。つまり、「説得力のある」とは「説得上手な、口の上手い」という意味です。パウロは人間の知恵によって聞く人々を納得させる、彼らを説得する、また、彼らに感銘を与えて彼らを救いへと導こうとする、そういうことを彼はしなかったと言うのです。ただ感情に訴えて、自分たちが期待している決心へと促すとか、それを導き出そうとする、そういうことをしなかったということです。もちろん、パウロは初めに言ったように罪人が救われることを望んでいました。でも、パウロは人間的な方法や巧みな話術、人間の知恵によって彼らを説得することによってこの救いへ導こうとはしませんでした。

2) パウロがしたこと : 彼がしたことは「御霊と御力の現れでした。」と書かれているように、聖霊なる神の御力が現わされるというその方法によったのです。自分の知恵や力によってではなく、神の御力が示されることを願いながら福音を語ったのです。パウロは「神さま、どうか助けてください。どのように話せばいいのかわからないし、どんな質問が来るのかわからない。でも、神さま、あなたの福音のメッセージを正しく語れるように助けてください。その力をください。そして、何とかあなたがこのメッセージを祝してあなたご自身のみわざを成してください。人々がこのメッセージをあなたからのものであること、そのことに気付いてあなたを見上げるように。」と願ったのです。

なぜ、パウロは人間的な知恵に頼らなかったのか、人間的に何とか人々を説得するような方法に頼らなかったのか？5節にその答えが出て来ます。パウロは人々の関心が自分に向くことを何とか止めさせようとするのです。考えてみてください。もし、非常に巧みなことばを使って人々に感銘を与えたり、人々をその巧みなことばで説得して、そして、救いに与ったとしたら、もしかすると、その人が感心するのは神ではなくて語っているその人かもしれません。「この人は凄い知恵がある。この人の話は凄く感動する。」などと言います。パウロは間違ってもそのようなことがあってはならないと知っていたのです。パウロはこの救いをもたらす神だけを明らかにしたかったのです。ですから、この「現れ」ということばは「指し示す、証拠」という意味がありますから、パウロは神が明らかにされるように、そのことを望んだのです。そこで人間的な方法によってこの救いを語ろうとはしなかったのです。

みことばを見ましょう。ローマ1:16「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」、Iコリント1:18「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」

皆さん、神が働くときに罪人は救いに導かれるでしょう。皆さんが救いに与ったのはだれかが巧みに話してくれたから救いへと導かれたのではなくて、神があなたのうちに働き、神があなたを救いへと導いてくれたからでしょう。もしそうでなかったなら、次のことが起こります。5節を見てください。

### 3. 宣教の目的 5節

5節「それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」、パウロはこのように「宣教の目的」を語っています。つまり、信仰を持った人たちが人間の知恵に支えられているのか、それとも神の力に支えられているのかのどちらかなのです。聖書の中を見たときに、皆さんお分かりのように、「信じた、救われた」と言う未信者がいっぱいいたわけでしょう。ですから、「信仰」と言っても、救いをもたらす信仰とそうでないものがあるのです。パウロが言っていることは「もし、私が人間的な技法を使って人々を説得して、そして、その人たちが決心したとしても、もしかすると、それは人間の知恵に支えられたものかもしれない。」ということです。

だから、何となく雰囲気でもってイエスを信じるとか、何となく責められて信じるとか、そういう人たちがすべて救われていないとは言っていませんが、実際に、聖書の中を見た時に、パリサイ人や律法学者たちは多くの知識がありましたが、彼らは救われていませんでした。そこでパウロは、そのような方法で伝えるのではなく、神のことばを正確に伝えることによって神に働いていただくのだと言います。人間のわざではなく神に働いていただくことによって、その人のうちに神が働き、神が救いをもたらしてくれるのです。まさに、「神の力に支えられた人となる」ということです。

この「ささえられる」とは「それを土台にする、それに基づく」ということです。人間の知恵に基づいた信仰なのか、神の力に基づいた信仰なのか？私たちがみな望んでいるのは神の力に基づいた信仰者になること、本当に神によって救いに与ることです。でも、そのために必要なのは、私たちが語るときに人間の知恵や人間のその策略によって福音を語るということではなくて、私たちは神の福音のメッセージをストレートに妥協しないで語ることです。そして、神のみわざが成されることを信じるのです。恐らく、皆さんはそのようにして福音宣教をされていると思います。パウロはこのように言っています。IIコリント4:10、11「10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。:11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。」。

今日、私たちが教えられたことは、パウロは福音宣教をするときに二つのことを絶対に妥協しなかったことです。一つは「メッセージを絶対に妥協することがなかった」、そして二つ目に「しっかりと目標を見上げて、その目的に沿って働きを為した」ことです。この福音を聞いた人々が人間の知恵に立つ信仰者になるのではなくて、それは救いではありませんから、神の力に立つ信仰者、つまり、本当の救いに与る者となるために、私はこのように福音宣教を行っているのだと、パウロはそのことを伝えたのです。少なくとも、私たちはそのことを模範としてこの働きを為すことができますね。

最後に、私たちはイエスの十字架を、また、この福音のメッセージを思うときに、どうしても忘れてはならないことを話して終わります。

#### ☆私たちがいつも覚えておくこと

- ・ 十字架につけられた主イエス・キリストだけが救い主であること。  
この方だけが神によって備えられた救い主です。
- ・ 十字架につけられた主イエス・キリストの福音だけが、救いをもたらすこと。  
それ以外の方法はないのです。十字架に架けられたイエスをどうして伝えるのか？  
この福音だけが人々を救うからです。
- ・ 自分に託されたことは福音を語ることであって、人を救うことではないこと。  
あなたは人を救うことはできません。私たちにできることはこの救い主を紹介することです。  
このすばらしい救いがあることを語るのです。
- ・ 自分には福音を語る資格も価値も、その力もないこと。  
「私たちはできる」ではありません。神にあってできるのです。  
我々のうちに力があるのではなく、神が我々の力なのです。
- ・ 自分には常に神の知恵と力が必要であること。  
どんな時にも神の助けを仰ぎ見なければなりません。神の知恵を求めなければいけません。  
皆さんが為しておられるように、だれかに福音を語る時に私たちは祈っています。  
「教えてください、主よ。この人の心を開いてください…」と。
- ・ ただ、神の栄光が現されることだけを願って語ること。  
だれのためにしているのか、自分が誉められるためではありません。  
自分が人々からよく見られるためでもないのです。自分が人々から称賛されるためにやっているわけではありません。神だけが称賛される、神だけが誉め称えられるように、  
そのためにやるのです。だから、パウロは人間的な手段、手法で福音宣教をしなかったのです。  
どんな時にも主に働いてくださることを願い、主の救いのみわざを期待したのです。  
パウロの語ったメッセージ、また、宣教の目的をしっかりとあなたの模範として、証し人として、この新しい一週間、置かれた所でその務めを為していきましょう。神は私たちを使って神のみわざを成してくださる、そのことを私たちは信じて、感謝して、その務めに神の助けをいただきながら、しっかりついていくことです。